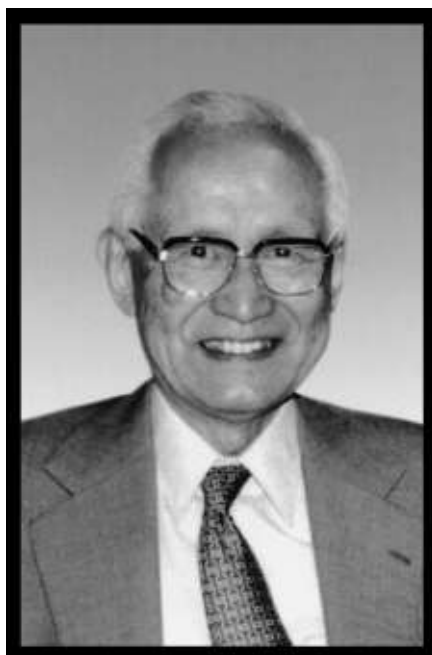


追 悼



故 大野丞二 先生 略歴

(1919年 11 月24日生—2005年10月21日没)

<学歴・職歴>

1939年 3 月 東京高等学校理科乙類卒業
1942年 9 月 東京帝国大学医学部医学科卒業
1942年10月 東京大学医学部附属病院第二外科入局
1944年10月 東京大学医学部附属病院第一内科に転科入局
1947年10月 自宅開業(1950年 9 月まで)
1950年10月 東京大学医学部第一内科に復帰
1956年 8 月 順天堂大学医学部講師
1957年 4 月 順天堂大学医学部助教授
1957年 6 月 医学博士授与
1964年 7 月 順天堂大学医学部特任教授
1969年10月 順天堂大学医学部内科(腎)講座担当教授
1978年 4 月 順天堂大学医学部附属病院副院長兼診療部長
(1980年 3 月まで)
1985年 3 月 順天堂大学医学部内科(腎)講座担当教授定年
退官
1985年 4 月 順天堂大学名誉教授
1985年 4 月 (財)産業医学研究財団アークヒルズクリニッ
ク院長
1985年 8 月 医療法人社団松和会目白クリニック院長
1989年 4 月 医療法人社団望星会望星病院院長
1991年 4 月 退任

<主な役職>

日本腎臓学会評議員(1959年11月21日～1989年11月 9 日)
日本腎臓学会監事(1971年11月 6 日～1977年12月 1 日)
日本腎臓学会理事(1977年12月 2 日～1985年 3 月31日)
日本腎臓学会名誉会員(1989年11月10日～)
日本内科学会 評議員
日本結合織学会 評議員
日本骨代謝学会 世話人
日本マグネシウム研究会 理事
第 3 回日本腎臓学会東部部会会長(1973年 5 月19日)
第 24 回日本腎臓学会会長(1981年10月29～31日)
第 16 回骨代謝研究会会長(1982年)
厚生省特定疾患「進行性腎障害」調査研究班班長
(1983年 4 月～1986年 3 月)
日本腎臓学会誌編集委員長(1979～1982年)
(財)健康科学振興財団 理事(1985～1991年)
(財)産業医学研究財団 理事(1985～1991年)
医療法人社団松和会 顧問(1985～1987年)
医療法人社団松和会 理事(1987～2000年)
医療法人社団望星会 理事(1989～1991年)

<賞>

第 5 回腎研究会学術奨励賞(1981年)
第17回腎研究会賞(1993年)

大野丞二先生の死を悼む

順天堂大学名誉教授

小出 輝

日本腎臓学会名誉会員 大野丞二先生は平成 17 年 10 月 21 日に肺炎のためご逝去されました。享年 85 歳でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

先生は昭和 17 年に東京大学医学部を卒業された後、一時、東京大学医学部附属病院第 2 外科に入局され、2 年後に第 1 内科に転科されております。この理由については定かではありませんが、その後の臨床内科医としての先生の視点に外科医的な要素がみられたことと無関係ではないかもしれません。さらに 3 年後に第 1 内科を辞して自宅で開業されておられますが、このことは先生のその後の臨床医としての生き方に強い影響を及ぼしたと考えられます。3 年後に東京大学医学部第 1 内科に復帰され、昭和 31 年に順天堂大学に移られるまで診療に専心されましたが、私はその前年に第 1 内科に入局し、幸いにも先生のネーベンとして直接ご指導いただくことができました。先生は手を取り足を取りといった指導はされませんでしたが、1 日 2 回は必ず患者の回診をされ、カルテに指示や感想などを赤ペンで記入されるのが常でありました。先生のような患者中心の医療は当時の大学病院ではきわめて珍しいといっても過言ではなく、大変感動しました。先生からは開業されておられたときに携帯用心電計を自転車の後ろに積んで往診された話など、いろいろな苦勞話を聞かせていただきましたが、このときの体験が先生の patient-oriented medicine の基礎になっていると考えられます。

昭和 44 年に先生は順天堂大学医学部内科(腎)講座担当教授になり、私に教室運営を手伝うよう要請されました。大野教授と同室に机をいただき、毎日一緒に患者の回診をしておりました。先生は腎臓病の臨床はもちろんのこと、内科学全般の知識が豊富で、回診やカンファレンスでは常に適切な診断と治療方針を指示されました。また、先生が大変な勉強家であることは有名で、奥様によると家に帰ると食事を済ませるや否やすぐに書斎に入り勉強されたということでした。先生とご一緒にオーストリアでの第 1 回腎糸球体基底膜シンポジウムに出席したときも、ホテルで同室させていただいたのですが、朝 4 時頃に起床され、抄録集を一生懸命読んでおられたことを思い出します。先生は竹を割ったような、正義感の強いご性格でした。そのために、ときには上司と争うこともありましたが、私心がなく純粋であったため、多くの人から絶大な信頼を得ておられました。

先生の博士論文は血漿膠質滲透圧に関するものでした(血漿膠質滲透圧及び血液水分像に関する基礎的及び臨床的研究、日内誌 45: 843-857, 1956)が、先生のご研究のメインテーマの一つは腎組織の電子顕微鏡的研究でした。莫大な量の腎生検標本と電子顕微鏡写真のなかに埋もれておられるときに最も幸福のようにお見受けしました。私も電子顕微鏡の操作を教えていただき、自分の研究に応用できるようになったのも先生のおかげであり、大変感謝しております。先生はまたマグネシウム代謝にも関心が高く、京都大学の糸川先生と日本マグネシウム研究会を立ち上げられ、日本におけるマグネシウム研究の発展に貢献されました。腎不全のマグネシウムとカルシウムの研究から副甲状腺ホルモンやビタミン D の研究へと発展し、東京医科歯科大学の須田先生と共同で血清 25-hydroxyvitamin D₃ 濃度測定法を開発されておられます。その後もいくつかの腎性骨異常栄養症に関する論文を日本腎臓学会誌その他に発表されました。先生は IgA 腎症にも興味を持たれ、昭和 56 年に先生が会長を務められた第 24 回日本腎臓学会総会に IgA 腎

症を最初に報告されたフランスの Berger 教授を招聘され、特別講演をしていただきました。これが日本での IgA 腎症研究の起爆剤となったと考えております。Berger 教授は大変温厚な先生で、旅費などの提供を申し出たところ、これはフランスの若い研究者の招聘に使ってくださいと言われたのには大変感動した記憶があります。

先生のご趣味はゴルフ、囲碁、クラシック音楽鑑賞、読書など多彩でしたが、なかでも囲碁は大変好まれて、昼休みには医局員を相手にされていることが多く、また、定年退職後も碁会所に通われていたとお聞きしております。

順天堂大学在職中の 29 年間の長い間、腎臓病学の基礎と臨床を身をもってご指導していただき深く感謝しております。お蔭様で多数の弟子たちはそれぞれの地域で指導的役割を果たしておりますし、順天堂大学腎臓内科も発展を遂げておりますので、どうぞ安らかにお眠りください。私たちは先生の「医の心」を今後も大切に精進してまいります。改めて謹んで哀悼の意を表するとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。